

●二人で味わう古典和歌(66)

谷深^{ふか}み春の光の遅ければ雪に包^{つつ}める鶯^{うぐいす}の声

菅原道真

『新古今和歌集』収載。「谷が深いために春の光が届くのが遅い。春を告げるといふ鶯の声も、いまだ雪のなかに包まれて聞こえてこないことだ」。

虚飾のない真直ぐな表現。谷、春、光、雪、鶯、声と一語一語のクリアなイメージがなめらかに連関しつつ、聞こえていない澄んだ鳴き声を一首にこだまさせている。「雪に包める鶯の声」という下句も簡潔ながらふつくと沁みてくる。形のない声を、融けのこる白い雪がふかぶかと包むさまは、感覚的なあたたかさをもたらず。

しかしこうした魅力は表面上のもので、背後には道真らしい寓意が込められているという。

鶏^{にぼり}既二鳴キテ忠臣旦^{あさ}ヲ待ツ。鶯未ダ出デズシテ遺賢

谷ニアリ

晩唐の詩人・賈島^{かとう}の詩「鳳^{おほとり}ヲ王ト為ス賦」の一節。



「遺賢」とはいまだ朝廷に用いられない在野の賢臣のこと。道真の歌と大きく重なるところがあるのは明らかだろう。鶯とは道真そのひとなのである。世に容れられない嘆きを鶯に託しているのだ。

道真にとつて鶯はとくべつな思い入れのある鳥だったやうで、たびたび彼の詩に登場している。

初メテ谷ヲ出デシヨリ人ニ憐^{あは}レマル。

「谷間を出たときから鶯は人に愛されてきた」。寛平七年に催された内宴に呼ばれ、そこで醍醐天皇から「一日百首の詩を詠ずる唐に倣つて、試しに今二時間で十首を詠じてみよ」と言われて一時間で披露したときのこと。誇らしい晴の記憶の一端を見ることができる。

その後、道真は大宰府に左遷され悲劇の運命を辿ることは多くの人の知るところだろう。大宰府でも、「柳毛無ク花毛無ク、鶯ヲモ聴カズ」という詩を残している。

ついに谷を出ることが叶わなかった声。しかし雪に包まれているそのうつくしい声を後世の私たちはたしかに聴くことができる。

(小島なお)